



## 迷走するスポーツ界

～スポーツにおける真の勝利を求めて～

三浦捷也

(三浦歯科医院 院長)

アメリカンフットボールの関西学院大との定期戦で、悪質タックルで反則した日大フェニックスを率いる内田正人監督が辞任した。絶対服従の雰囲気の下、将来を見込んだ選手に精神的圧力をかけ、成長を促す…。日大アメフト部内田監督による特異な指導が明らかになった。

そんな中、強権でアマチュアボクシング界を牛耳ってきた、日本ボクシング連盟の山根明会長も辞任に追い込まれた。二人によって「ボス支配の不幸事」「強いリーダーシップを履き違えた指導」の実態が表面化し、前近代的閉鎖社会とも言えるスポーツ界の内幕が露呈された。

その他、大相撲の傷害事件、至学館大の栄監督に絡むレスリング界や日本体操協会のパワハラ問題などなど枚挙にいとまがないし、学生スポーツ界の暴力的事件も子どもたちのスポーツ現場での暴言・体罰などのパワハラ行為も、相も変わらず後を絶たない。こうした相次ぐスポーツ界の不幸事と密室化したスポーツ界の組織運営は、もはや少数の特別な人物、特別なスポーツ団体のことでは片付けられないように思う。プロ・アマ・学生スポーツを問わず、スポーツ界全体の長い間構造的に抱えてきた問題点が、今になって浮き彫りになったと捉えるべきであろう。スポーツ団体でトップリーダーになり、強い権限を持つ立場になると、急に不遜で尊大な態度をとる人を身近でも目にすることが多い。スポーツマンシップとは対極的な行為が、なぜ

日常的に行われているのだろうか。華々しいスポーツ報道の裏側で、手放しでは喜ぶことのできない腐敗と退廃が進行している。「勝たねばならぬ」一辺倒ではなく、目先の結果だけに執心せず、一步引いたところからスポーツを見つめることも必要ではないか。

－競技力向上に偏重するスポーツ界－

スポーツで勝利を目指すこと自体は、人として自然の行為である。「勝敗」を無視しては語れないが、最近のスポーツ界は「勝敗・結果」が殊の外、重視される傾向が強くなっている。

本来、自由な意思と自主的な行動で作ってきたスポーツが、勝利主義や商業主義と結びつき、競技力向上に偏重している。教育の一環である中高生の部活も、年端のいかない小学生のスポーツまでもが強化対策の末端を形成し、勝つことが最優先となり「鍛え、競い、勝つこと」に向けた体制がより強くなっている。その結果、指導者や保護者だけではなく、教育関係者までもが、スポーツの目的が「トップアスリートの育成」「高校野球強化」などに固執し過ぎ、人間性を高めるというスポーツ本来の目的を見失っている人が多く見られる。

小学生時代に「フェアプレー精神」の基礎が形成されることを考えると、この時期に歪んだ考え方が培われたのでは、スポーツ組織のトップリーダーの育成も、日本のスポーツの健全な発展も到底望むことはできない。

スポーツ活動の基礎となる小学生のスポーツも中高生の部活動も、子ども自身が心からスポーツを楽しみ、自分らしさを表現できる環境を整え、子どもたちの持つ個性や能力を引き出し、スポーツを通じて成長できるように、指導者は子どもたちのサポートに徹するべきだ。その先に真の勝利があると信じたい。

### ースポーツ指導・負の連鎖ー

長年、指導者の暴力や学校の部活動のあり方など、スポーツ界の課題に取り組む弁護士望月浩一郎氏は、「アメフト悪質反則問題」の背景について示唆に富んだ提言をしている。「力による支配を受けた選手が試合に勝てば、そこに『誤った成功体験』が生ずる。やがてその選手が指導者という立場になると、その経験に基づいた指導をするようになる。これは負の連鎖に他ならない…」と。

スポーツも文化的活動も人格形成も、すべて10歳までの出会いや体験が、その後の人生に深く関わると言われている。幼い頃から競技をし、勝敗を積み重ねていくと、子どもたちは自然に勝利を至上する考えに陥り、スポーツだけではなく、人間関係でも「勝ち負け」の優劣でしか捉えられなくなるという指摘と理解した。望月氏の「スポーツ指導、負の連鎖」の考え方は、競技力向上に偏重するスポーツ界への警鐘と捉えるべきではないか。

スポーツ活動の基礎になる小学生の時期に、人間性を育てることを軽視し、勝つことを優先してきたことと、迷走するスポーツ界とは決して無縁ではないように思う。スポーツが人間性を高めることを忘れて、勝つことのみを価値を求めていると、スポーツの未来に明るい展望はないだろう。

### ー「勝敗と結果」は挑戦へのスタートー

現在、問題視されているスポーツ界を変えるためには、本質的には、小学生のスポーツや中高生の部活動がトップアスリーの登竜門になっているシステムを改善すると共に、勝利至上主義を是としている社会全体のスポーツに対する考え方が変わらなければならないだろう。

指導に於いては、トップアスリーを目標に掲げて指導をしたとしても、トップアスリーへの道が厳しいのは今更言うまでもない。「勝敗や結果」は新たなスタートである。勝つことよりも勝利を目指す過程をもっともっと重視・評価するスポーツ環境と、指導体制の確立が大切ではないか。スポーツは社会性が強く、様々な問題が介在するので、一筋縄では解決できない面も多い。例えば「体罰」を一つとってみても、スポーツに熱心に取り組んでいる学校や団体なら普通にやっているという常識が根強く残っている。だから迷走するスポーツ界を直ちに正すことは決して容易なことではないが、頼むべきは子どもたちだ。それは次のスポーツ界を担い、次の時代を創るのは子どもたちだからである。

私は昨今のスポーツ界の報道を受け、「黒を白」と言われても唯々諾々と従うことが美德とされてきた常識を振り払い、「自分の視点を持ち、自分の言葉で語り、相手の考えをも受け入れられる」スポーツ少年を育てる責任と大切さを再認識することになった。「慣習の優位」「権威への服従」のスポーツから、「真の勝利を求める」スポーツへの熱い思いと願いは、純真さの消えない子どもの心の奥にしっかりと刻まれ、次の時代に花開くであろう。そのことを期待し、私はこの後も子どもたちへの応援を続ける。